

第2章 下田遺跡出土の裨褱式木甲について

神谷正弘

下田遺跡は、石津川左岸下流域に位置し、河川交通と陸路を押さえる役割を持つ集落と見られる。今回の発掘で大溝より、木甲・木製琴・塵尾の木部と思われる木製品・四方転びの箱多数・朱塗剣把・剣形木製品・船の櫂・船底に溜った水を汲むアカトリと呼ばれる木製柄杓など多種多様の遺物が出土している。中でも木甲は、裨褱式で日本より出土した木甲21例の内唯一の例であり、筆者の予想もしていなかった形式の木甲で、以前に私は木甲の小論をまとめており、⁽¹⁾下田遺跡木甲について論じてみた。

下田遺跡木甲は、裨褱式木甲の前胴部分で右側の一部を欠損しているが、全長約42.5センチ、胴裾部の幅約24センチ、厚さは部分によって違い6ミリ～1センチである。縦木取りで、かなりの大木から素材を取っており節などは見られず、素材の選定に注意している様子が窺え、何領も木甲を製作している熟練した工人の存在を感じさせる。樹種は、柳属で水辺の湿地に多い樹であり、石津川近辺から採取した可能性が高い。柳属の樹は、軽く白地で柔軟性があり、折れにくく細工しやすい。柳属の樹を利用した木甲には、Tab.35に見るとおり、伊場・平城宮下層木甲があるが、樹種鑑定の出ていない物も多いので、筆者の考えでは、柳属の樹木を利用した木甲はもっと多いと思われる。

下田木甲は、表・裏・端部に刃物痕が残っていて、表側には数本の横線が刻まれており、表・裏・端部に漆などの塗料を塗った形跡はない。断面は人体胸部から腹部の曲線を表している。端部は粗っぽく面取りされている。胸元は大きくU字型にして、蹲った時顎を突かないようにしてあり、胸元下には径8ミリの懸緒の穴2個を空けて後胴と連結する。穴には紐ずれ痕がある。左側裾部に割れ目が入り、2個の穴を空けて紐で綴じて、補修して使っているところを見ても、かなりの期間使用していたのだろう。他に戦闘などによる破損の痕跡は無い。刃物痕の残る仕上げや、漆が塗られていないことから見ても、首長階級の人物でなく、集落の兵士が使用した実用品であろう。

下田遺跡出土の木甲を、今まで知られている木甲と違い裨褱式甲の前胴と判断した理由は、前胴の幅が復元しても約30センチ程度で狭く、腹部前面を覆えるくらいである点、完全に残る前胴左側に短甲形式に見られる後胴と繋ぐための連結穴が無い点。

全長は約42.5センチとやや長い、胸元は大きくU字型に空けて、左右肩を保護するため左右に張り出している点。

もう一つ後胴としなかった理由は、時期は下がるが滋賀県松原内湖木甲を例に取ったの事である（5世紀初頭）。この木甲は後胴で全長48.5センチの数値で、前胴として着用した場合、蹲ると確実に顎を突く、また襟元を保護するためU字型に空けていない。以上の理由による。

筆者が考えている現在までに出土した木甲の形式分類は下記のようなになる。

1、短甲形式 古墳時代の短甲のように、基本的に前胴2枚・後胴1枚の3部分から構成される。伊場・雀居遺跡木甲が代表例。

2、札甲形式 分厚い布地などに、長方形・台形・方形の厚さ5～6ミリの漆などを塗った木製小札を紐で縫い付けていく。南方・生立ヶ里遺跡が代表例。

3、裨褱形式 前胴1枚・後胴1枚の2部分から構成される。懸緒で前後胴を繋ぎ腹部で帯を締め着

用する。胴部の両脇が空いているのが特徴で、この弱点は、木甲の下に着込む厚手の衣服などで補う。下田遺跡がただ一例。

筆者は、1、短甲形式は、日本独自で発達した形式と考え、2、3の形式は大陸から伝来した形式と考えている。下田遺跡木甲を、大陸系の裨褱式鎧の影響下に製作されたものとして、その源流をどこに求めるかという問題になる。

「中国古兵器論叢」⁽²⁾の1、中国古代の甲冑（9）南北朝の「裨褱」鎧と「具装」鎧の項には、次のように述べられている。「裨褱鎧の名称の来源はその形が服飾中の裨褱形状に近似することに因むものである。「釈名」には『裨褱、其の一は胸に当て、其の一は背に当つるなり』とある。裨褱鎧の特徴もまたまさに「一は胸に当て、一は背に当て」、肩の上で帯をもって前後を釦聯していることである。裨褱鎧は南北朝期に盛行するが、漢代の甲制にその渊源関係を求めることができる。楊家湾の前漢陶俑がつける一類一型鎧甲は胸甲と背甲を肩の上で帯をもって結びつけている。この類型の甲は当時騎兵の使用にやや適していたためか楊家湾の騎俑は全てこの一類一型鎧甲を装備している。ただし、前漢一類一型鎧甲は脇下で一つにつながっているが、裨褱は脇下でつながらない。真の意味での裨褱鎧は三国時期に初めて出現し、前に引いた曹植の「先帝賜臣鎧表」には一領の裨褱鎧が記録されている。中略～このことは一方では曹魏の時既にこの様式の鎧甲が装備され始めていたことを説明し、一方では数量よりみて、それが一般の鎧甲に比べて非常に少なく、おそらく一種の新しい比較的優質な鎧甲であったことを映し出している。中略～南北朝時期に到り、裨褱鎧は暫次軍隊中の主要装備となり、かつまた武官の主要な服制に定められた。例えば北齊の河清年間（562～564）に定められた宮衛制度においては左右衛將軍はいずれも裨褱鎧をつけることになっている。」裨褱鎧の材質は鉄製・革製の小札を綴ったものである。戦乱・内乱に明け暮れた南北朝時代は、軍制・軍備に力が注がれ、優秀な武器・甲冑の改良も行われた。大量生産しやすく着用に便利なのが、この鎧の特徴であろう。そして裨褱式鎧は、高級軍人の着用する鎧として宮廷制度に取り入れられている。

楊泓氏の論ずるところによれば、南北朝時代において裨褱鎧から模倣した革製の裨褱衫があり、武官の衣服制度に広く採用された。裨褱衫は、前後各一枚の革製の物を懸緒で繋ぎ、着用の際は腹部に帯を

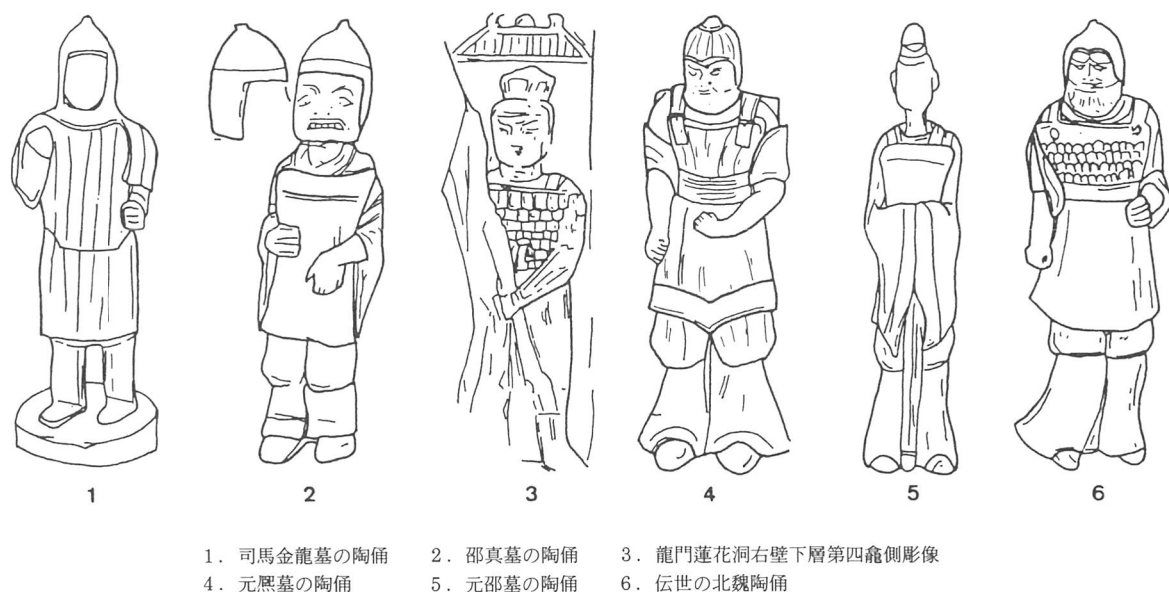


Fig. 400 北魏の鎧甲（中国古兵器論叢42ページより）



1. 隋張盛墓の白瓷俑 2. 隋封氏墓の陶俑 3. 唐敦煌156窟の壁画(儀衛) 4. 唐敦煌194窟の壁画(侍臣)

Fig. 401 隋唐の裋褡衫 (中国古兵器論叢45ページより)

結んで固定する。恐らく厚手の革を重ねて貼り合わせて漆などを塗り、彩色した物であったろう。鎧の下に着用する物でもあった。Fig.400の5の陶俑に見られる。小札威しの裋褡鎧より一層簡単な鎧である。この形式の鎧は隋唐時代になっても使用され、Fig.401の陶俑に見られるとおりである。裋褡鎧・裋褡が下田木甲の源流と考えるはどうだろうか。

日本に一例だけ、この大陸からの移入品と考えてよい裋褡式鉄製鎧の可能性の高い出土品が、奈良県葛城郡香芝町城山2号墳(4世紀末)の粘土槨⁽³⁾から出土している。同古墳の報告書考察編(110~113ページ)において、白石太一郎氏はこの札甲を北朝系と想定している。中国の動乱期の南北朝時代に流行した裋褡式鎧を模倣した木甲が、何故下田遺跡で使用されていたか、下田遺跡の出土物からこの遺跡の性格を推察すると、古墳時代3世紀末~4世紀初期の、畿内ヤマト政権の直接支配下にあった重要な集落と思われる。そのため一定の武装兵を常置しており、後に石津川が陶邑の須恵器を運送するルートの一つに利用されたことから分かるように、大阪湾の海上交通も含めた軍事的な役目を持っていた集落ではないだろうか、それゆえ古墳時代に突入し、権力拡大に努力するヤマト政権が、大陸の文物・軍事制度を積極的に導入・模倣した時に、その制度は直属集落まで及んだのではないか、甲冑・武器は、それぞれの民族が独自に発明し、改良を加えて優秀な物に完成させて行くことが多い。そのような甲冑・武器が普及して行くのは、異民族との交易・外交交渉などによる贈答品や、歓迎式典・将軍号の授与式などの国家儀礼に居並ぶ文武官僚の華やかな服装・甲冑・武器に圧倒されてその模倣をする場合や、戦時援助による甲冑・武器の提供による場合があるだろう、また交戦による戦利品などを手本に模倣する場合がある。

下田遺跡からは、南北朝時代に貴族社会に流行した威儀具の、塵尾を模倣したとみられる環状木製品も出土している。集落の祭祀・儀式に臨む時に、統率者として威儀を整えて塵尾を手にし、美しく飾られた蓋に従者に差し掛けさせて、大陸に流行した最新の裋褡式鎧を模倣した木甲を、着用した武装兵達に警護された下田遺跡の首長の姿を思い浮かべてはどうだろうか。

Tab. 35 日本出土木甲一覧表

番号	時代	遺跡名	所在地	時期	出土遺構	形状・特徴	樹種	木甲の型式と特徴	文献
1	弥生	伊場	静岡県浜松市	後期前半	環壕	右前胴 後胴左半分 木甲の全面に各種の土器 文様を彫刻し、黒漆・丹 を塗り分けている。 縦木取り 2点	柳	①短甲型式 在来型 前胴2枚、後胴1枚	「伊場遺跡」遺物 編1 伊場遺跡発掘調査 報告書第3冊 浜松市教育委員会 1978
2	弥生	鹿田	岡山県岡山市	終末期	井戸内	後胴右肩部分 胴部片 裾部片 他破片 木甲全面に沈線・凹線文 を彫刻し、黒漆を塗る。 縦木取り 3点	朴か栃	①短甲型式 在来型 前胴は不明、後胴は 1枚と思われる。	「鹿田遺跡1」 岡山大学構内遺跡 発掘調査報告第3 冊 岡山大学埋蔵文化 財調査研究センター 1988
3	弥生 古墳	板付	福岡県福岡市 南区	終末期 古墳初頭	水田址の 水路より	右前胴破片（前胴引合せ 部分） 漆などは塗っていない 縦木取り 1点	赤檜 亜属	①短甲型式 在来型 前胴2枚と後胴1枚 で構成されると思わ れる。	「板付周辺遺跡調 査報告書（8）福 岡市埋蔵文化財調 査報告書」第83集 —1981年度調査概 要— 福岡市教育委員会 1982
4	弥生	雀居	福岡県福岡市 南区	後期	環壕	後胴右側半分 ほぼ全面に各種の土器文 様を彫刻し、黒色塗料 （柿渋？）を塗っている。 縦木取り 1点	柿	①短甲型式 在来型 前胴2枚・後胴1枚 で構成されると思わ れる。やや小型の木 甲である。	「雀居遺跡2・3」 福岡市埋蔵文化財 調査報告書第406・ 407集 福岡市教育委員会 1995
5	弥生	惣利	福岡県朝倉郡 夜須町	中期前半	溜池	後胴左肩部分 スイズ貝を模した文様と 沈線を彫刻する。塗料な どは肉眼で見える限り塗ら れていない。 縦木取り 1点	不明	①短甲型式 在来型 前胴2枚・後胴1枚 で構成されると思わ れる。	「朝日グラフ」 通巻3842号 朝日新聞社 1995.12
6	弥生	南方1号	岡山県岡山市	中期	河道 用水路他	前胴裾部片 綾杉文を彫刻し、赤色塗 料（朱）を塗っている。 縦木取り 1点	不明	①短甲型式 在来型 前胴2枚であるが後 胴は不明。	「考古学研究」 第42巻第2号 （通巻166号） 1995
7	弥生	南方2号	岡山県岡山市	中期	河道 用水路他	短冊形・長方形・台形の 木製小札の端部に穴をあ けて漆を塗り、布地など に綴じ付ける。 約30点	不明	②札甲型式 大陸の鉄製札甲を模 倣したと思われる。	「考古学研究」 第42巻第2号 （通巻166号） 1995
8	弥生	ひやけんがわかねもと 百間川兼基	岡山県岡山市	中期	旧河道	長方形の木製小札の端部 に穴を空けて黒漆を塗り 布地などに綴じ付ける。 1点	不明	②札甲型式 大陸の鉄製札甲を模 倣したと思われる。	無
9	弥生	うりゅうがり 生立ヶ里	佐賀県小城郡 牛津町	中期前半	方形土壇 下層	短冊形・台形の木製小札 の端部に穴を空けて布地 に綴じ付ける。肉眼で見 える限り漆などは塗って いない。 40～50点	不明	②札甲型式 大陸の鉄製札甲を模 倣したと思われる。	「生立ヶ里遺跡— 土木製品図録—」 牛津町文化財調査 報告書第7集 牛津町教育委員会 1995
10	弥生	はるのつじ 原ノ辻1号	長崎県壱岐郡 芦辺町	中期～ 後期	環壕	前胴の可能性が高い。漆 などは塗っていないと思 われる。未製品 縦木取り 1点	不明	①短甲型式 在来型	「岐岐・原ノ辻遺 跡」 長崎県教育委員会 1995
11	弥生	はるのつじ 原ノ辻2号	長崎県壱岐郡 芦辺町	中期	土器溜	L字形の木製小札の端部 に穴を空け、黒漆を塗っ て、布地などに綴じ付け る。この小札は脇下に使 用した物かも知れない。 1点	不明	②札甲型式 大陸の鉄製札甲を模 倣したと思われる。	「岐岐・原ノ辻遺 跡」 長崎県教育委員会 1995
12	古墳	しゃかやま 釈迦山	愛知県安城市	初頭 4C前半	包含層	前胴懸緒 表側に突帯文を彫り出し 裏地を付ける小穴を空け ている。前胴が胴部分と 懸緒に分かれていたと思 われる。表面に赤色顔料 を塗っている。 木取り法不明。 1点	広葉樹 系	②短甲型式 在来型 前胴2枚であるが、 後胴は不明。	「日本出土の木製 短甲」 考古学論集第3集 歴史堂書房 1990

13	古墳	まつばらないこ 松原内湖	滋賀県彦根市	中期初頭 5 C 初頭	包含層	後胴左半分 襟首は浅くU字形にして あり、肩先は張り出して いない。黒漆塗り。表側 に皮紐により、鉄製短甲 の状態を模倣している。 縦木取り 1点	楓属	①短甲型式 鉄製短甲を模倣。 前胴不明。後胴は1 枚である。	「日本出土の木製 短甲」 考古学論集第3集 歴史文堂書房 1990
14	古墳	あかの いわん 赤野井湾	滋賀県守山市 赤野井地先	5 C 代か	大溝	後胴右脇部分(?) 表側に帯状の段を削り出 し、段に沿って小穴を空 けて布地を縫い付けてい る。肉眼で見る限り塗料 などは塗っていない。 縦木取り 1点	不明	①短甲型式 鉄製短甲を模倣。 前胴2枚と後胴1枚 で構成されると思わ れる。	「赤野井湾遺跡一 湖岸堤天神川水門 工事に伴う埋蔵文 化財調査報告書」 滋賀県教育委員会・ 滋賀県文化財保護 協会 1986
15	古墳	つば い 坪井	奈良県橿原市 常盤坪井	中期初頭 5 C 初頭	溝	左前胴(?) 全体に文様帯を割付けて 三角形、五角形、長方形 の文様を削り出し、黒漆 を塗った後に紋様帯に赤 色塗料を塗っている。 縦木取り 1点	不明	①短甲型式 鉄製短甲を模倣。	企画展「貫頭衣を 着た人々のくらし ー上ノ山・坪井遺 跡の発掘調査成果 ー」 橿原市千塚資料館 1983
16	古墳	へいはなやか 平城宮下層	奈良県奈良市 西大寺	中期初頭 5 C 初頭	河川跡	後胴右脇部分 脇の湾曲に沿って帯状の 段を削り出している。3 列の小穴を空けて、裏地 を縫い付ける穴としてい る。漆などは塗っていな い。 縦木取り 1点	柳属 (?)	①短甲型式 鉄製短甲を模倣。 前胴2枚と後胴1枚 で構成される。	「奈良国立文化財 研究所年報」 奈良国立文化財研 究所 1986
17	古墳	しも だ 下田	大阪府堺市	初頭 3 C 末	溝	前胴 腹部と胸部全面を防護す るようになられている。 漆などは塗ってなく、刃 物痕が多く残っている。 左裾部に割れ目が入った のを補修している。 縦木取り 1点	柳属	③桶襦型式 桶襦式鎧を模倣して いる。 前胴1枚と後胴1枚 で構成される。	
18	古墳	みえうのき 三重櫓ノ木	佐賀県佐賀郡 諸富町	4 C	井戸	上端が丸い方形の木製小 札に、上端1本、中央2 本、下端2本の帯がある が、これは小札に小穴を 空けて桜の樹皮で返し縫 をして帯にしている。表 は黒漆を塗った上に朱を 塗っている。裏は朱だけ 塗っている。この小札を 布地などに綴じ付けたと 思われる。 柱目材 1点	広葉樹 系	②札甲型式 大陸の鉄製札甲を模 倣したと思われる。	「三重櫓ノ木遺跡」 諸富町文化財調査 報告書集第8集 諸富町教育委員会 1990
19	古墳	やのまち 柳町1号	熊本県玉名市 河原崎	4 C 中頃	井戸	後胴肩部から中央部 肩部は襟首を保護するよ うに作られており、裏地 や懸緒を取り付けるため の小穴が多く空けられて いる。補修痕もある。肩 部に黒漆痕と赤色顔料が 残っている。中央部分に は赤色顔料が一部残って いる。 縦木取り 3点	シオジ	①短甲型式 鉄製襟付短甲を模倣 したと思われる。 前胴2枚と後胴1枚 で構成される。	「西片町遺跡」 付編 柳町遺跡出 土の木製短甲資料 紹介 熊本県文化財調査 報告第153集 熊本県教育委員会 1996
20	古墳	やのまち 柳町2号	熊本県玉名市 河原崎	4 C 中頃	井戸	前胴左側 全体に厚手の作りで最大 厚さ2.0cmである。鉄製 短甲を模した線刻を施し 裏地を縫い付けるための 小穴を多数空けている。 漆を塗っているが、黒漆 かどうか不明。 縦木取り 1点	楠科	①短甲型式 鉄製短甲を模倣して いる。 前胴2枚と後胴1枚 で構成される。	「西片町遺跡」 付編 柳町遺跡出 土の木製短甲資料 紹介 熊本県文化財調査 報告第153集 熊本県教育委員会 1996
21	古墳	の だ いっばんすぎ 野田一本杉 (利田柳)	佐賀県神埼郡 神埼町	不明	不明	未製品で2個体あるが、 前胴が後胴が不明。 2個体を1本の太木から 縦木取りで取っている。 2点	不明	①短甲型式	「日本出土の木製 短甲」 考古学論集第3集 歴史文堂書房 1990

註

- 1, 神谷正弘「日本出土の木製短甲」『考古学論集』第3集 歴文堂書房 1990年
- 2, 楊泓著 監訳網干善教 翻訳来村多加史「中国古兵器論叢」関西大学出版部 1985年
- 3, 「馬見丘陵における古墳の調査」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊 奈良県教育委員会 1974年

かみや まさひろ（高石市教育委員会）